21世紀COEプログラム

「誕生から死までの人間発達科学 ―生涯発達追跡センターの構築―」の現況

人間文化研究科教授　内田 伸子
（拠点リーダー）

現代は子どもにとっても大人にとってもまことに生きにくい時代です。科学技術の発展や少子高齢化の進展、グローバリゼーションの加速化に伴う変動期を迎えた今日、人は様々な発達段階や移行段階で多様な危機的移行に遭遇します。発達過程の多様性や発達課題の達成度の差異が累積していく人生の後半期ほど、危機的問題の幅が拡大していきます。

このような深刻な課題をかかえた状況を打開するために、現在、発達科学は、特定の発達段階にのみ焦点をあてるのではなく、長期的なライフスパンのパースペクティブに立って、誕生～死にいたる各ステージ内・ステージ間の移行、異なる移行を体験しつつある異世代間の対話や相互作用のメカニズムを解明することが急務であると考え、「誕生から死までの人間発達科学―生涯発達追跡センター―」を形成いたしました。この拠点は二〇〇二年度の21世紀COEプログラム（人文科学分野20件）に採択され、昨年（平成十四年）十月からこの拠点を担う事業推進者たちを中心にして、大学院人間文化研究科人間発達科学専攻の各講座のスタッフ、大学院生からなる機動性の高いプロジェクト体制を組み、プロジェクトを開始しました。

現在、本拠点では、四つのプロジェクトが進行中です。第一に、心理学系のスタッフが中心になって推進する基礎的心理発達過程を解明するプロジェクトで、テレビゲームやビデオ視聴などの映像メディアが脳機能に与える影響、子どもの文化財と生活時間の変化、保育の質の変容過程などについての基礎的な実験研究、調査研究が行われています。第二に、発達臨床心理学系と子ども発達教育研究センターが中心になって推進しているプロジェクトで、フィリピンの貧困層を対象にした子育て支援研究、途上国の幼児教育支援研究、幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究、学校現場における個と集団をつなぐ発達支援プログラムの構築研究などを推進しています。第三に、教育科学系が中心になって進める子どもから成人へのトランスミッションに及ぼす社会・文化的要因の影響を探るために日本の青少年の、学力・能力、アスピレーション、進路・職業生活について大規模な調査研究を実施しています。第四に、応用社会学や生活社会科学系が中心のプロジェクトで、四五～六五歳の中高年女性の危機的移行と社会的・福祉的支援の長期縦断追跡を実施しております。これは、質問紙調査に加えて人手と時間のかかる面接調査も組み込んで精力的に研究を推進中です。

シンポジウムで講演する内田伸子先生

この拠点を形成して何よりも嬉しかった点は三つ。一つは、素晴らしいスタッフたちと共同プロジェクトを組むことにより、スタッフたちの競争、共創、協創の場が生まれたこと。二つ目は、研究システムを拠点事業推進に合わせて改変し、有機的な連携を可能にするものへと改変する見通しが得られ、スタッフや院生たちの研究意欲が盛り上がったこと。三つ目は、大学院生の指導体制の強化をはかる仕組みが強化されたことです。その仕組みの一つは、最先端の研究方法論を知り、知の交流を目的とした教育セミナーやワークショップ、シンポジウムなどを定期的に開催していること、もう一つは大学院生への研究助成を目的とした公募研究制度を作ったことです。これは、教育上の意義があるだけでなく、事業推進者を中心としたスタッフ教官だけではカバーできない未知の領域や方法論を発掘し、プロジェクト全体をより豊かで生産的なものとするための試みでもあります。公募研究制度は研究一件につき上限五〇万円の研究費を支援するもので、研究計画の具体性、成果への見通し、研究の独創性、学界への貢献度などから三段階の審査を経て受給者を決定し、その成果は原著論文として厳しい審査を受けて秋に公刊されました。

シンポジウムの聴講者
（本田学長や平岡教授も）

以上のように、プロジェクトの第一の山場を迎えた採択二年目の今年（平成十五年）は、お茶大の個性を輝かせるような成果をあげたいと、一同、気を引き締め、プロジェクトを推進中です。発達COEでは、本年度難関を突破して採択されたジェンダーCOEとの緊密な連携をはかりながら、成果を出していきたいと考えております。